

新しいアイデアを投入しながら、  
総合型地域スポーツクラブの普及をめざします。

### 中主町B&G海洋センター（滋賀県）

マリンスポーツのメッカ、琵琶湖に面する絶好のロケーションを活かしながら、ヨットやカヌーの普及に力を入れてきた滋賀県の中主町B&G海洋センター。しかし、最近の子供たちは塾通いなどで忙しくなったせいか、最盛期には40名を数えた海洋クラブの会員も、いまでは15名ほどになってしまいました。

「ここ数年、新入会員は1，2名といった状況が続いています。何度も募集をかけますが、スポーツ好きな子はスポーツ少年団に行ってしまう傾向もあります」

準備が大がかりなうえ天候にも左右されやすいマリンスポーツは、忙しい現代っ子には敬遠されがちなようですが、絶好のロケーションを目の前にして、このまま黙っているわけでもありません。

「オリジナルの設計で10人乗りのドラゴンカヌーを4艇づくり、琵琶湖の祭りで行われる和船の競走をヒントにレースを催したところ、予想外の反響がありました」

チーム同士の対抗戦で、ドラを鳴らし合って盛り上がるができるためか、今年の大会には町内から15チーム、計200名が参加。

人口1万2千人の町ですから、これはたいへんな参加率です。



人気を集めているオリジナルのドラゴンカヌー。  
チームの旗を立てられるようになっています

### 総合型地域スポーツクラブの先進地として、視察の対応に追われています

同じように、新しいアイデアを基に普及の波に乗っているのが、同海洋センターを拠点に活動を開始した「さざなみスポーツクラブ」です。これは、いま文部科学省が推進している、いわゆる総合型地域スポーツクラブですが、目標に掲げた150名の定員を軽くオーバーしてしまい、現在は250名の会員が活発に活動しています。

「募集に力を入れたわけでもないのに、自然発生的にこれだけの会員が集まってしまいました。そのためか、視察に訪れる自治体関係者の方々も少なくありません」

人気を集めた理由は、その活動メニューにあるようです。

「最初から、体協傘下の団体さんと競合してしまうような既存の種目はメニューに入れませんでした。愛好者の取り合いになってしまったら、良い結果にはなりませんからね。その代わりに、ドラゴンカヌーなどのイベント競技をはじめ、アクアビクスやパターゴルフといった新しいスポーツ種目やレクリエーションスポーツのメニューを積極的に導入してみました」

総合型地域スポーツクラブでは受益者負担が前提になっていますが、多くの地域でネックになっている会費の問題も難なくクリアすることができました。

「もともと、海洋センターで行っている各教室は有料での参加ですから、ごく自然に会費の制度は受け入れられました。

t o t o などからの支援が終了した後を見据えた場合、クラブ運営の独立採算をめざして、より利益の得られるメニューを開発していかねばなりませんので、毎月1回はメニューに工夫を加えるための会議を開いて知恵を出し合っています」

いま、議題に上げられているのは、来年度のイベントメニューをどうするかという問題ですが、これにはさまざまな会員の意見のほかに、体協関係者や体育指導員からの意見も寄せられているそうです。

「さまざまな人から、いろいろな発想が生まれます。いまのところ、来年は山岳協会の方をお願いして、琵琶湖周辺の散策を年に5回ほど実施してみたいと思っています」

ボランティアスタッフはすでに25名が確保されており、今後は指導員の育成をどのように進めていくかが課題だと語る同海洋センター。いろいろな人が知恵を出し合いながら、きっとすばらしい解決策が生まれることでしょう。



さざなみスポーツクラブでは新しいスポーツのメニューを積極的に採用しています



7月20日の「海の日」には、海洋センターの器材をすべて使いながらマリンスポーツフェスティバルを開催。さまざまなマリンスポーツの体験イベントを行っています



海洋クラブに入る子の数は減ったとはいえ、琵琶湖という絶好のロケーションのもと、ヨットの活動は積極的に展開しています。今年には日本少年少女オープンヨット大会が開催されました